

文藝文化



太宰施門著

文藝文化

三省堂刊

(出文協承認)
ア360207續

昭和十八年二月二十日初版印刷
昭和十八年二月二十八日初版發行

(四〇〇〇冊)

著者

太宰施門

東京市神田區神保町一丁目一番地

發行者

株式會社 三省堂

代表者 龜井豐治

東京市神田區三崎町二丁目十六番地

印刷者

東京印刷製本株式會社
代表者 荻野貴右

(東京四七)

發行所

東京市神田區神保町一丁目
振替東京三一五五五

株式會社 三省堂
會員番號一二一五〇一

大阪市西區阿波座下通二ノ六

株式會社 三省堂大阪支店

配給元

東京市神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

文藝文化

抄定價 二圓	合計 二圓三錢
特別行爲稅 三錢	
相當額	

文藝文化

序

我が日本民族のやうに過去に長い歴史を有つてゐる民族は、自然いくつかの時代に分れた、異つた特色の各時期を送り迎へ、さうしてそれぞれにその全盛期、小黄金時代の輝きを誇り得るのが一般の例である。奈良朝にも平安朝にも、鎌倉時代にも江戸時代にも、何處にもその中心の時期があり、それを挟んで前後に形成期と過渡期とが誤らずに置かれてゐる。明治以後も矢張り同様であつて、我々は西洋文化をよるこんで移し入れ、輝やく新世代を開かうとしてここに七十年の努力を傾けた。全盛の秋はまだ來てゐない。何うであらう、現代はまさにその手近な所に迫つてゐるのであらうか。或ひはまだこの上仲々の骨折りが日本民族に命ぜられ、さうして漸やく歴史的な大示現が我々によつて達せられるのであらうか。

序

その邊の疑問についてこの書の中で私は多少の解答を試みた。もとより各人の教養と見聞と経験とは千差萬別であり、一人一人考へが異なり、將來に向けようとする指針の動きがい

く分相違するのは止むを得ない。しかし心ある者は國の前途を念ひ、後の方に備へる今の用意を慎重に、また細密に練つて置くのが、その課せられた義務の一つであると言つてよからう。もとより誰もその意を述べ、人の言を聴き、なほ反省して次第に鍊磨をかさねて行く。

論議は發表されたものの上で、熱意と良心と謙遜をもつて行はれることが言ふまでも無く最も願はしい。この小冊がよくその規を守つて、不快を人に加へないで、然もよく有用な示唆を與へ得るであらうか。著者は努めてそれを期し、讀んだ書物、感じた諸藝術品、親しんだ東西各地から得た收穫を基礎に、出来るだけ眞實に精確に、その思想を伸展させるやうに骨を折つた。むろんそれらは日本國臣民としての重大な務めを果すといふ大きい喜びの前に、極めて容易に忍ばれた些細な辛勞に過ぎなかつた。

内容の筋道は目次で示されてゐるとほり、平明でまた一本立に進んでゐる。すなはち美を愛し貴ぶ心構へが文化民族には要りようであり、その全く缺かれない資格、強く大きい活躍の動力として最も基本のものであるといふ意味を色いろの面から説いて行つた。全民族が従つて文藝を尊重し、その興隆を願ひ望むあこがれが強く伸張して、子女教育の上に一刻も早くあまねく行きわたるやうに著者は希望した。またそれに關係して今日、我が國の文學界に

絶對支配の威を振ひつづけてゐる外國、殊に西洋の文藝作品を何う我々は取扱はねばならぬであらうか。或ひはもつと廣く、全體の西洋文化浸漸の勢ひを如何に眺めねばならぬであらう。事柄は非常に重大であり、輕々しい處斷は後日へ小さくない禍ひを残す結果となるに決つてゐる。だから最後の二章で出来るだけ緩くり問題を検討して、一應のまとまつた考へを述べるやうに努めて見た。

題材が大きく廣幅のものであるだけ、疑問の解決から實行へと進んで、その果の結ばれ實の上るのは、早く見て二十年三十年以後の事である。しかし、だからと言つて一日も研究を忽せにしてならないのは言ふまでも無い。否、それどころか、現下周圍の狀勢では今日にも明日にもと言ふ、緊急な重要問題であると著者は考へた。その理由は本文中に述べて置いたが、その判斷が實を言へば本書の編述を急がせ、意外に仕上げを抄らせた主な動機となつてゐたもののやうに思はれる。従つて當然、この本の上梓は近頃で彼を襲うた、最も深い悦びの一つであつた。

昭和十七年秋

著

者

目 次

第一章 趣味文化……………三

——人格の形成——趣味の魔力——趣味文化の雰囲気——新と古——
島根縣松江市——日本婦人——藝術の都北京——京の西郊上嵯峨——

第二章 文化の偉力……………三六

——富と強さと文化——長崎市——三文化の抗爭——加特力教會——
フランス文化——第三共和制下の文藝——國家の文化政策——文藝家
は時代の感性——文藝の尊重——

第三章 文藝教養……………一〇五

——文藝の聖典——古典教養——ロマンチック讀書——讀書の三圓周法
——クラシク讀書——文學研究振興——

第四章 日本と西洋……………一三三

——明治維新——西洋流行——靴と下駄——疊——西洋物は廉くて便
利——和洋共通のもの——孝の道と親の愛——「焰送り」——和洋で違
ふもの——嗜好趣味——日本國民文化——

第五章 西洋文學……………一九三

——外界自然——心理研究——東西演劇の比較——西歐よりの光——
ルネサンス期と明治以後——文藝書の翻譯——現代小説管見——新よ
り質へ——

文

藝

·
文

化

第一章 趣味文化

——人格の形成——趣味の魔力——趣味文化の雰囲気——新と古——島根縣松江市——日本婦人——藝術の都北京——京の西郊上嵯峨——

第一章 趣味文化 3

二年餘前私は北支へ旅行して、實に愉快に北京に滞在したことがある。期間は二週間といふ短い間であつたが、殆んど連日連夜感激で送つてしまつた。色々述べたいことがある中で一ばん強く感じた項目の一つは、むろんその結論となつた判斷は新らしく初めての私の経験ではないが、そこに同時に居た數萬の同胞と北京人との間に見られる種々の相違から來るものであつた。何ぶん言語も習慣も宗教も文學もよく私には分らないのだから、ほんたうの事は何とも言へない。しかし可なり大切なと思はれる點三四を併せた理由によつて、纏まらな

いながら感想の一端として確められた事は、一括して人間の形成、人格の修養あるひは建設

のために、一人一人が彼自身の趣味を高める、すなはち美を愛し判じ、それを重んずる心を養ふ必要があるといふこと、そしてそれに便利を與へ、進んでは奨励し、十分の設備をととのへて置くのが文化社會、國家の負ふ當然の義務であるといふ説である。

話しはこゝで北京を離れて、もつと根本の、一般の問題まで溯つて考へを練らねばならない。先づ一たい人がこの世に生きて働らく上に、才能と健康が要り用なのは言ふまでも無い。全然才能が無く健康に恵まれてゐなかつたなら、その人はただ呼吸をして飯を食べるといふだけの凡庸以下の廢人である。言はゆる穀潰しの仲間入りをして周圍に迷惑をかけ、自分も肺甲斐無く一生を擦り減らしてしまふばかりである。反對に少しでも人より才能が優り、身體の強さが優位にあれば、それだけ仕事が多く出來、また秀れた成績を擧げて重んぜられ、自分でも満足である。

だがこゝで私は問うて見たい。果してこの二つだけで十分であらうか。何ちらも最大と言はれるものを身に著けたとして、それで自分は立派な、最上の人間であらうか。何うもさうではないらしい。幾ら仕事がよく出來ても、いくら丈夫であつても、それはつまり長持ちのする、よく出來た器械といった感じである。その人が物質以上の、器械以上の、動物以上の

靈長であるといふ存在をはつきり身に體するのには、この二つのものが在つて結構であるが、強ひて言へば無くても構はない。例へば何の役に立つ才能も無く、健康は至つて勝れない厄介な代物であつても、その感情が美しく趣味が高尙で、それらに聯關した方面に正しい確實な判斷力を有つて居れば、實に申し分の無い、立派な人間的存在になるのである。そしてその生活が周圍に迷惑を掛けないでずうつとやつて行けるのだと、何の眼に見えた仕事をして居ないやうではあるが、實は可なり大きく廣く人間世界の役に立つてゐるのである。この點を卑近な日常生活に例を取つて少し詳しく述べて見よう。

人は何の種の階級、地位、職業に屬してゐようと、毎日の暮しをただ一人の孤立で營むことは無い。必ず他の同類と會ひ、話し、一しよに歩き、また共同で食事をする。その間に誰しもの本能である、是が非でも不愉快をいやがり、愉快を求める。一度二度の經驗が重なると、あらかじめ判斷して、悦びの得られさうな所へ、面白く愉快になれるさうな周圍へと足を向ける。そこでそれ迄にたまつた憂苦のつかへを放散し、或ひは忘れ、次の日の仕事に入り用な活動力を準備する。これは萬人に漏れの無い皆なの心やりと毎日の行事であつて、何千年來、東西南北の諸國諸部落で、ただ一つの例外も無い普遍の重大事實である。

そこから社會を組み立ててゐる各人はそれぞれ、大きな、毎日の義務を皆なの間に命ぜられてゐるのである。その一個人一個人が出来るだけ速く容易に、その時々、の憂苦や疲勞から離れることが出来るやうに、望み得られるだけ豊富に、新鮮な活力が貯はへ得られるやうに、各人がただの一人の例外も無く氣をやり、念ひを致す心がけが肝要である。電車の入り口に立停つて出入りの邪魔をする乗客や、喫茶店などで中央のストーヴへ態々椅子をすり寄せるお客などは、全然かうした心得の無い、言はば社會生活の罪人である。彼等は第一に多くの人の精力と神經とを同時に疲れさせ、全景の眺めを粗惡にして、慰安を求める他の人の心を一時に曇らせる。そして間接に各人の仕事の能率を低くし、その健康を弱らせて社會、國家、全體の活力に大きな障害を與へる。斯うした例は他にも幾らも數へられる。劇場内で、或る俱樂部の會合で、汽車や汽船の中で、旅館で、三四の遊戯場で、先づ殆んど漏れ無くこの種の個人主義が我が國で跳梁すると言つて敢て差支へ無からうかと思はれる。

斯ういふ際に直ぐ外の人達の心を察し、よく氣がついてそれに不安や迷惑を與へないやう、出来るだけ愉快に、滑らかにすべてを運ぶやうにと注意する心構への人々、さういふ人達ばかりの社會でなしあつたなら、相寄つての貢獻はそれこそ幾ら賞めても賞め足りないばかり

であらう。彼等の中には何も仕事は出来ない、また健康も至つて脆弱な者もあるであらうが、この方面での寄與はそれこそ廣大で限り無く、社會全體の盡きない活力の泉として毎日の仕事に與かつてゐるのである。彼等の努力も加はつて初めて人の接觸、交はりの上に温か味が生じ、空氣が靜穩に、心が落ちつきと安まりを見出す。實に重要な、無くてならない國家的存在である。然も私は寡聞、まだ斯ういふ人達を公けに賞揚した例を見たことも聞いたことも無い。

所でこの種の作法人、禮儀作法をよく辨まへ、事に臨んで迅く適切な處置に出る人達にも、もとよりその種類や程度は千差萬別である。しかし概して、よい家に生れたとか、よい環境に育つたとかいふ經歷が可なり物を言ふやうである。謂はゆる躰けがよい子供の成人した仲にさういふ選ばれた人が多い。また自分自身でよく氣を附けて、一方、仕事に對する能力を磨き、健康を増し進めるやうに骨を折しながら、他方、それ以外の道に絶えず注意を拂ひ、意味のある人格の教養に努めつづけた人達もその中に加はつてゐる。結局この二方面の人は、他から仕向けられるのと自分自身で行ふのと違ふだけで、同じ色の、似寄りの集團をつくり上げてゐる同一部屬の人々である。一寸見には異様に思はれるかも知れないが、趣味世

界の門に入門した、貴い心の人々だと定義して適切ではないかと考へる。

この命名をはつきり證據立てる例を、東西古今の色いろの歴史や出来事から、無數に引いて來て列べ上げるのはいとも容易である。が時間を短縮するために、先づ一寸氣の附いた卑近な思ひつきを述べることから始めよう。餘りにお粗末過ぎた話でただ嗤ひを招くだけのものであるやうだが、これだけでもう十分、私の提案が眞理そのものだし、また世間が知らず識らずの中にみんな肯定してゐるよい證據になるだらうと思はれる。

所でそれは、あながちこれらの人の身に附いた、禮儀作法ばかりに關した事でなく、大凡その人間のこと、その考へ方、行動、感情の全部にわたつて、日常語の間に我々の挿む「趣味」といふ一呼吸の言葉の有つ魔力である。「いい御趣味です」、「趣味が高い」、これはほんたうにその人柄を賞讃し、慕ひ、あるひは羨んで述べる言ひ方である。だがそれよりも否定の方にすつとはつきり強く、人の行動や心やり、性格の全面にわたつて總括した判定を投げつけて、我々は「趣味に反く」とか、「沒趣味だ」とか、「惡趣味だ」、「無趣味だ」とか言ふ。斯ういふ宣言は外の何んな考へ方や同情や辯護の入り得る餘地の無い、またその全然認められない最後のものなのである。もうこの判決が下されると、それこそ取り返し餘地は

無い。それほど強く餘程廣い範圍にわたつた心行きや舉動はその味の薄さ、方向違ひ、はしたなさ、淺ましさ、一語で言つて美しくない醜さが糾彈せられるのである。實に大きい力、言はば一種の魔力、偉力をもつてこのたつた一走りの呼吸の語が我々衆生の上に臨んでゐる。效果は絶大で無制限で、何人もそれを争ひ、否定し、局限することは許されない。適當に言つてその聲は至上のもの、絶對の指針として我々に命ぜられた、「神」よりの處斷である。

何うしても人はだからこの意味に理解した趣味を有たねばならない。美を愛し判じ、尊敬する心を養ひ育て、少くもある程度までは深め高めて行くことが我々の何人にも命ぜられる。然るに明治以後、初めの中は學問さへ出來ればよい、外は一切お構ひ無しでそれだけに若い間ぢゆう身をささげて、えらい人間になり、出世をし、お國の役に立つ立派な者が出來上る。さういふひた向きの盲信に押されて明治年間の人達は勉強した、むろんほんたうにそれだけだつたら少しもえらくなれず、世にも立てない片輪者ばかり出來る筈だつたが、少くも學問專一の目標がはつきり大きく少年青年の行く手にかかげられてゐた。

その中にあたり惜しい俊才だつたのに、將來の輝やかしい光明だつたのに、と數あるえら者の夭折ををしみ、悲しむ聲が八方から聞えて來た。いくら頭がよくても勉強が出來ても、